

『学 生』

6 学生の受入

基準 6-1

教育の理念と目標に照らしてアドミッション・ポリシー（入学者受入方針）が設定され、公表されていること。

【観点 6-1-1】アドミッション・ポリシー（入学者受入方針）を設定するための責任ある体制がとられていること。

【観点 6-1-2】入学志願者に対して、アドミッション・ポリシーなど学生の受入に関する情報が事前に周知されていること。

[現状]

本学の教育目的は、従来、「教育基本法、学校教育法および私立学校法に従い薬学に関する学校教育を行う」と寄附行為に定められてきたが、平成 18 年新薬学教育制度の発足に伴いこれを「薬学に関する学校教育を行い、薬剤師をはじめとして社会の多様な分野で活躍できる、創造性と人間性豊かで有為な人材を育成する」と改め、育成する人物像を具現化した。これを受け、大阪薬科大学薬学部においては、薬剤師の養成を主な目的とする 6 年制の薬学科と研究者や技術者などの養成を主な目的とする 4 年制の薬科学科の 2 学科が併置された。本学が 2 学科を併置した目的は、多方面で活躍する有為な人材を養成してきたこれまでの実績を踏まえ、人々の健康ならびに高度医療に貢献する高い資質をもつ薬剤師と医薬品の研究・開発をはじめ、さまざまな薬学領域において活躍が期待される薬学スペシャリストを養成することであり、またそれが社会から本学の薬学教育に要請されていることでもある。両学科の選択にあたっては、3 年次までに薬学出身者に共通して求められる薬学科目と教養科目を履修し、両学科の特徴を十分に理解した後に、学生が自らの適性を自ら判断して学科を選択できるカリキュラムを導入している。各学科における教育目標を以下に記す。

【薬学科：6 年制】薬学の基礎的、応用的、実学的知識や技能はいうまでもなく、人間としての豊かさ、医療人としての自覚を身に付けた人材の育成を目指す。

【薬科学科：4年制】大学院修士課程と連携して、医薬品の研究・開発をはじめさまざまな薬学領域において活躍が期待される薬学の専門家の養成を目指す。

こうした目標のもと、大阪薬科大学薬学部は、自ら学ぼうとする強い意欲と地道に努力する勤勉さを備え、薬学の多様な分野で活躍できる柔軟性に富んだ学生を求めている。

本学のアドミッション・ポリシーは、学長を委員長とする入試委員会において設定され、教授会において承認されたものである。アドミッション・ポリシーなど学生の受入に関する情報はもとより、教育・研究内容、学生生活、ならびに卒業後の進路までを大学案内のパンフレット、Web サイトなどを介して公表・発信し、本学での大学生活を容易にイメージできるように工夫し、明確に入学志願者に伝えるよう努力している。さらに、高校訪問、入試説明会、オープンキャンパスにおいて、本学の入学者受入方針について、志願者、保護者ならびに進路指導者に対し直接説明を行っている。

[点検・評価]

1. 本学のアドミッション・ポリシーは、教育の理念と目標に照らして学長を委員長とする入試委員会において設定され、教授会において審議・承認されたものであり、全教職員が共有している認識事項である。
2. 本学のアドミッション・ポリシーは、大学案内のパンフレット、Web サイトなどを介して広く社会に公表・発信されている。

[改善計画]

1. 本学のアドミッション・ポリシーは、責任ある体制の下に設定されているが、アドミッション・ポリシーの設定に至るまでに、多大の労力と時間を要する。したがって、社会のニーズに適切に対応するために、迅速かつ柔軟にアドミッション・ポリシーを改変する委員会を設置することが望まれる。

基準 6-2

学生の受入に当たって、入学志願者の適性及び能力が適確かつ客観的に評価されていること。

【観点 6-2-1】責任ある体制の下、入学者の適性及び能力の評価など学生の受入に関する業務が行われていること。

【観点 6-2-2】入学者選抜に当たって、入学後の教育に求められる基礎学力が適確に評価されていること。

【観点 6-2-3】医療人としての適性を評価するため、入学志願者に対する面接が行われていることが望ましい。

[現状]

本学薬学部における平成 18 年度からの入学定員は、薬学科 270 名、薬科学科 30 名であり、入学試験では学科選択を行わず、4 年次進級時に学生の適性や将来設計に従って学科を選択できるカリキュラムを導入している。平成 19 年度に導入した指定校制推薦入試、平成 19 年度に再開した編入試を含め、現在、下記の 7 つの方式で入学試験を実施している。これらの入学試験においては、学科試験中心の選抜だけでなく調査書重視の選考など、評価尺度を多元化することにより、多様な資質をもち、かつ入学後の教育に対応できる学生を選抜している（表 6-2-1）。

① 指定校制推薦入学試験：

本学が指定する高等学校の校長から、高校 3 年生の生徒が推薦を受け、出願する方式である。指定校については、本学への入学実績（志願者数、合格者数、入学者数など）、入学後の成績等を考慮し、選定している。

② 公募制推薦入学試験：

薬学を学びたいという強い意思を持つ現役高校生が対象であり、理科と外国語（英語）の適性確認を行う。また、日常の学習成果を反映させるために、調査書を大幅に評価に加えている。

③ センター試験利用入学試験：

理科、外国語（英語：リスニングを含む）、数学の点数で合否を判定する。理科については化学、生物、物理のうち最高得点科目を採用し、その得点を 2 倍する。

④ 一般入学試験Ⅰ（F方式）：

理科、外国語（英語）、数学の学力試験に加え、調査書によって高等学校での学習の成果を大きく評価する。なお、400点満点のうち150点が調査書による評価点である。

⑤ 一般入学試験Ⅱ（G方式）：

薬学を学ぶ上で不可欠な3科目（化学または生物、英語、数学）の学力試験成績によって合否を判定する選抜方法である。

⑥ 帰国生徒特別選抜入学試験：

外国の高等学校を卒業した受験生が対象である。理科、外国語（英語）の成績と面接、提出書類を総合して合否を判定する。

⑦ 編入学試験：

大学、短大、高専、専修学校の専門課程（修業年限4年以上で文部科学大臣が定める基準を満たすもの）の卒業生または卒業見込みの者は、本学2年次に編入できる。本学1年次修了に相当する基礎学力を確認するため、学力試験5科目（基礎有機化学、基礎生物学、基礎化学、数学、英語）の成績と面接、提出書類を総合して合否を判定する。

これらの方式の他、平成13年度からA0入試も導入していたが、平成18年度選抜を最後に休止している。本方式は、志願者が持つ潜在的な可能性を重視し、薬学を学びたいという強い意欲、適性、様々な能力、活動歴、人間性といった学力以外の側面を評価に取り入れようとするものであった。単なる一芸入試というものではなく、第二次選考では薬学を修めるうえでの基礎学力の有無を確認するという、異色の内容であった。しかしながら、志願者数が伸び悩み、選抜機能が適正に機能しないのではと危惧されたため、本方式での募集は現在のところ休止している。

学科試験（化学、生物、英語、数学）については、学長指名による出題責任者が出題委員会を組織し、複数の教員が作成した問題を取りまとめ、難易度、量、出題範囲の適切さなどを決定する。また、入学試験実施後、問題を公開することにより、その適切さを検証

している。さらに、出題責任者は、合格者判定案策定のための学長を委員長とする入試委員会に同席し、平均点・標準偏差などを参考に、入学後の教育に求められる基礎学力を有していると考えられる基準についての講評を求められる。

現在、本学が実施している入学者選抜に係わる7方式のうち、既に述べたように面接を課しているのは3方式（指定校制推薦入試、帰国生徒特別選抜入試、編入試）である。しかしながら、単に学力試験だけに留まらず、高等学校の調査書を大きく点数化する入学者選抜も2方式（公募制推薦入試、一般入試Ⅰ（F方式））ある。この調査書を点数化することにより、合格者判定に高等学校3年間での人物評価も加味されると考え、面接に代わる人物把握方法として活用している。

入学志願者の合否については、入試委員会ならびに教授会において判定されている。過去4年間の志願者数、受験者数、合格者数、および入学者数は、表6-2-2に示すとおりである。このように本学は、資質の異なる学生が同じキャンパスに集い、刺激しあい、切磋琢磨しながら、成長していける場でありたいと考え、多様な入学試験を実施しているところである。

[点検・評価]

1. 現在の組織・体制の下、公正かつ厳正な入学者選抜が実施できているものと考えている。
2. 入学者選抜に際し、評価法を多元化することによって多様な可能性を持ち、資質の異なる学生を積極的に受け入れるべく努力を重ねている。これにより、志願者は本人に最も適した入学試験を選択することが可能となる。
3. 入学者選抜方法の多様化に伴う入学者の基礎学力の不均一性の問題は、「3. 薬学教育プログラム」の項で述べたように、これを十分是正しうるカリキュラムにより解決されている。
4. 入学者選抜において、面接を課すことあるいは調査書を評価に取り入れることで、自ら薬学を学ぼうとする強い意欲があり、理科的な素養を持ち、かつ地道に努力する勤勉

さを合わせ持った志願者が選抜できているものと考えている。

[改善計画]

現時点においては、入学者選抜のあり方を大きく改善する必要性はないものと思われるが、今後、各入学試験における募集人員および評価方法を精査するとともに、調査書を評価に取り入れた入学試験のさらなる充実や面接を課す新たな入学試験の導入について検討したい。

表6-2-1 平成22年度入試概要

平成22年度入試概要

入試種別	指定校制推薦入試 (R方式)	公募制推薦入試 (S方式)	センター試験利用入試 (C方式)	一般入試Ⅰ (F方式)	一般入試Ⅱ (G方式)	帰国生徒特別選抜入試 (K方式)	編入試 (H方式)
入学定員	50名	80名	20名	70名	80名	若干名	5名
募集人員	50名	80名	20名	70名	80名	若干名	5名
選考内容 (時間・配点)	<p>[推薦書]</p> <p>[調査書]</p> <p>全体の評定平均値が3.7以上の者</p> <p>理科は、「化学」を履修している者</p> <p>[面接]</p>	<p>[調査書]</p> <p>(理科、外国語の評定平均値 各25点、 数学、全体の評定平均値 各50点)</p> <p>適性確認</p> <p>[理科] 75分</p> <p>化学Ⅰ、生物Ⅰから1科目を選択する</p>	<p>センター試験利用科目</p> <p>[理科] 200点</p> <p>化学Ⅰ、生物Ⅰ、物理Ⅰ のうち最高得点科目を採用し、 それを2倍する</p> <p>[外国語]</p> <p>英語(リスニングを含む) ※記述式(200点満点)とリスニング (50点満点)の合計得点を200点 満点に換算する</p> <p>[数学]</p> <p>数学Ⅰ・数学A 数学Ⅱ・数学B</p> <p>本学の個別学力検査等は実施しない</p>	<p>[理科] 90分</p> <p>化学(化学Ⅰ、化学Ⅱ「選択分野を含む」) 生物(生物Ⅰ、生物Ⅱ「選択分野を含む」) から1科目を選択する</p> <p>[外国語] 75分</p> <p>英語Ⅰ 英語Ⅱ</p> <p>リーディング ライティング</p> <p>[数学] 75分</p> <p>数学Ⅰ 数学Ⅱ 数学A 数学B(数列、ベクトル)</p> <p>[調査書]</p> <p>150点</p> <p>(理科、外国語、数学の評定平均値 各25点、 全体の評定平均値 75点)</p>	<p>[理科] 90分</p> <p>化学(化学Ⅰ、化学Ⅱ「選択分野を含む」) 生物(生物Ⅰ、生物Ⅱ「選択分野を含む」) から1科目を選択する</p> <p>[外国語] 90分</p> <p>英語Ⅰ 英語Ⅱ</p> <p>リーディング ライティング</p> <p>[面接]</p> <p>学習意欲、日本語能力を確認する 漢字を修める上で必要な分野を試問する</p>	<p>適性確認</p> <p>[理科] 75分</p> <p>化学Ⅰ、生物Ⅰ から1科目を選択する</p> <p>[外国語] 60分</p> <p>英語Ⅰ 英語Ⅱ</p> <p>リーディング ライティング</p> <p>[面接]</p>	<p>[英語] 45分</p> <p>[数学] 45分</p> <p>[基礎者機化学] 60分</p> <p>[基礎生物学] 60分</p> <p>[基礎化学] 60分</p> <p>[面接]</p>
判定	面接の結果及び提出書類を総合して判定する	適性確認等及び提出書類を総合して判定する	センター試験の成績及び提出書類を総合して判定する	学力試験等及び提出書類を総合して判定する	学力試験及び提出書類を総合して判定する	適性確認、面接の結果及び提出書類を総合して判定する	学力試験、面接の結果及び提出書類を総合して判定する
備考	専願制/現役に限る	現役に限る					2年次に編入

表 6 - 2 - 2 入学試験結果

平成 18 年度

	AO	推薦	センター利 用	一般入試1	一般入試2	帰国	合計	入学者/入 学定員
志願者	34	358	620	593	1,113	0	2,718	
受験者	34	356	620	574	943		2,527	
合格者	8	112	216	302	391		1,029	
入学者	8	57	9	102	145	0	321	

平成 19 年度

	指定校	推薦	センター利 用	一般入試1	一般入試2	帰国	合計	入学者/入 学定員
志願者	50	551	761	590	1,041	1	2,994	
受験者	50	546	758	570	903	1	2,828	
合格者	50	184	202	249	319	0	1,004	
入学者	50	93	4	73	88	0	308	

平成 20 年度

	指定校	推薦	センター利 用	一般入試1	一般入試2	帰国	合計	入学者/入 学定員
志願者	46	546	694	538	935	3	2,762	
受験者	46	539	694	520	774	3	2,576	
合格者	46	189	278	232	270	2	1,017	
入学者	46	96	23	89	105	2	361	

平成 21 年度

	指定校	推薦	センター利 用	一般入試1	一般入試2	帰国	合計	入学者/入 学定員
志願者	39	535	614	478	814	2	2,482	
受験者	39	534	613	464	653	2	2,305	
合格者	39	190	226	194	261	0	910	
入学者	39	91	23	75	115	0	343	

基準 6-3

入学者定員が、教育の人的・物的資源の実情に基づいて適正に設定されていること。

【観点 6-3-1】 適正な教育に必要な教職員の数と質が適切に確保されていること（「9. 教員組織・職員組織」参照）。

【観点 6-3-2】 適正な教育に必要な施設と設備が適切に整備されていること（「10. 施設・設備」参照）。

[現状]

本学薬学部の教員の現員は、平成 22 年 2 月 1 日現在 65 名であり、その内訳は、教授 26 名、准教授 9 名、講師 19 名、助教 9 名、助手 2 名である。このうち、薬学専門教育担当教員は 58 名、基礎教育（教養教育）を担当する教員は 7 名である。一方、本学の入学定員は 300 名で、平成 21 年度における 1 年次生～4 年次生までの在籍学生数は、1,359 名であり、6 年制完成年度である平成 23 年度には在籍学生数は、およそ 1,800 名になる。平成 21 年度においても教員数は必ずしも充足されているとはいえないが、今後特に医療系分野における教育体制の充実を目指し、教員の数と質が適切に確保されるよう計画的な増員を検討しているところである。また、教員の年齢構成についても助教の採用など、改善を図るべく併せて努力している。

このような状況下において、学部教育を充実させる目的で非常勤講師およびティーチング・アシスタントを任用している。非常勤講師には、大学教員のみならず産・官界から医療従事者、研究者、技術者などを招き、高度化する薬学教育全般に対応させている。ティーチング・アシスタントに採用された大学院生は、主に情報科学演習、基礎実習、特別実習などの教育において教員の補助を受け持つとともに、自らは指導者としての心構えを修得している。

適正な薬学教育に必要な講義室や基礎実習室のほか、RI 実習室、情報科学演習室など薬学の進歩に対応できる各種実習設備があり、ゆとりある学習環境を提供している。また、より専門的な研究を可能とする中央機器研究施設、動物関連研究施設および RI 研究施設を B 棟に配置している。さらに、共用試験（CBT/OSCE）への対応も含め、新しい臨床薬学系

教育、実務実習事前学習のための施設・設備を擁する新学舎が平成 21 年 3 月に完成した。この学舎には充実した臨床薬学系実習施設のほか、セミナー室や自習室を備えている。その他、早期体験学習や薬局実務実習に活用されている附属薬局、生薬学などを学ぶ上で重要な役割を果たす薬用植物園、ならびに多彩な蔵書を取り揃えている図書館などがある。

[点検・評価]

1. 入学者の適正な教育に必要な近代的な施設や設備は、十分に整備されているものと考えている。
2. 現在の入学者定員に対する教員の割合は、必ずしも充足されているとはいえず、教員の職位、年齢構成についても偏りが見られる。

[改善計画]

1. 本学の教育理念と目標を達成するためには、入学者定員に対する教員の割合は、必ずしも充足されているとはいえず、6 年制完成年度までに、特に医療系分野における教育体制の充実を目指し、教員の数と質が適切に確保されるよう計画的な増員を実施しつつある。
2. これには、教員の職位、年齢構成についても改善を図るべく併せて計画されつつある。

基準 6 - 4

学生数が所定の定員数と乖離しないこと。

【観点 6-4-1】 入学者の受入数について、所定の入学定員数を上回っていないこと。

【観点 6-4-2】 入学者を含む在籍学生数について、収容定員数と乖離しないよう努めていること。

[現状]

本学の入学定員は 300 名であり、【基準 6 - 2】で述べたように現在 7 方式で入学試験を実施している。入学定員に対する入学者数は表 6-2-2 に示すとおり、平成 18 年度は 1.07 倍、19 年度は 1.03 倍であり、ほぼ予測どおりに入学者を受入れることができた。しかしながら、平成 20 年度は 1.2 倍、平成 21 年度は 1.14 倍となり、この入学者数は、日本私立薬科大学協会学長会議での「平成 16 年度までに、入学者数は入学定員の 1.1 倍以内とする」という申し合わせの実施を目指したものの、それを上回る結果となった。平成 20 年度入試において、従来の方式により合格者数を決定したところ、特にセンター試験利用入試（募集人員：20 名）、一般入試 I（募集人員：80 名）、および一般入試 II（募集人員：90 名）において、合格者は例年と全く異なった動向を示した。センター試験利用入試においては、一昨年度の合格者に対する入学者の割合（歩留まり率）は 4%、昨年度は 2%であったため、合格者数を昨年度に比べ若干多くしたところ、歩留まり率が 8%に上昇した。また、一般入試 I および II について、それぞれの歩留まり率は一昨年度 33%、41%、昨年度は 29%、27%であり、これに全体の志願者数が減少したことを併せ勘案し、合格者数を減らしたところ、予想に反し、歩留まり率が一般入試 I および II とも 38%に上昇し、結果的に入学者が増加した。一方、平成 21 年度においては、センター試験利用入試、一般入試 I、一般入試 II に関しそれぞれ合格者数を絞り込み、これらの合格者総数を前年度よりも減少させた。これは平成 20 年秋からの経済不況から私学離れが予測されたこと、平成 21 年 6 月からの薬剤師法の改正やこれに関する報道などにより薬学部志向に翳りが生じているのではないかと懸念されたことなど諸々の社会情勢の変化を踏まえ、併せて入学定員厳守を念頭に判定したものの入学者は定員を超過した。

一方、在籍学生数と収容定員との比率は、申し合わせ当初からこれを遵守することを目標としていたため、平成 18 年度から 21 年度までの在籍学生数は 1.09 倍から 1.14 倍の範囲に留まっている（表 6-4-1）。

[点検・評価]

1. 平成 18 年度および 19 年度は、ほぼ予測どおりに入学者を受け入れることができたが、平成 20 年度および 21 年度においては、予測を上回る入学者を受け入れる結果となった。
2. 入学者の受入数が入学定員数を大幅に上回ることは、教育効果の低下に繋がることから、入学志願者の動向を詳細に解析する必要がある。

[改善計画]

入学志願者の動向を詳細に解析し、この解析結果を活用することによって、過年度の入試動向を再評価し、合格者の動向予測を今一度見直すことにより、入学者の受入数の大幅な増加を抑制することができるものと考えている。

表 6 - 4 - 1 在籍学生数

平成 18 年度

	1年	2年	3年	4年	合計	在籍学生数/ 定員
在籍学生数	328	338	304	333	1,303	1.14
学年定員	300	300	300	240	1,140	

平成 19 年度

	1年	2年	3年	4年	合計	在籍学生数/ 定員
在籍学生数	320	329	331	330	1,310	1.09
学年定員	300	300	300	300	1,200	

平成 20 年度

	1年	2年	3年	4年	合計	在籍学生数/ 定員
在籍学生数	371	335	314	332	1,352	1.13
学年定員	300	300	300	300	1,200	

平成 21 年度

	1年	2年	3年	4年	合計	在籍学生数/ 定員
在籍学生数	353	374	339	293	1,359	1.13
学年定員	300	300	300	300	1,200	